

## こ れ か ら の 私

今年もグラジオラスの芽がいっぱい出てきた。そこの草ぬきをしていると、昨年亡くなった姑の事を思い出す。働き者で一日中農作業をし、米だけでなく、様々な野菜を作ってくれていた。また、収穫した大豆で味噌や豆腐を作ってくれた。畑や庭にはたくさんの花も植えてくれていて、季節ごとに咲き、仏様にお供えすることができている。姑は、花が咲くと孫たちに学校に持たせてくれていた。私も孫ができたならそうしたいと思っていたのが実現できている。先日、息子が農作業をしてくれた時、ゆで卵を持って帰らせようとする時、「ばあちゃんと同じやん。」と言われて、はっとした。姑は何かというときよくゆで卵を作っていた。40年近く一緒に居たら、知らぬ間に同じ事をするようになっていた。

私は、昨年秋には、実母も見送った。母は器用で、洋裁和裁編み物と何でもでき、母の手作りの服を今も着ている。身の回りには母の思い出の品がいっぱいあり、ひ孫たちにもチョッキやセーターを編んでやり、みんなの心の中で今も生きている。

こんな二人を見て育った我が子は、手作りの良さを知っているので、作る手間をいとわない。子どもの誕生日ケーキを作ったり、手提げ袋を縫ったり、今年の冬は、余った大根で切り干し大根も作っていた。おばあちゃんから多くの事を学び、大きな影響を受けて育っているのだ。

じゃあ私は何を残せるのかと考えてみた。主人は何かにつけ、「嫁にどう躰るんや。」と私にプレッシャーとブレーキをかけてくる。私がしている事は、息子の嫁や孫たちが見ているのだと自覚せずにはいられない。退職後、私なりにがんばっているのは米作りである。姑の仕事を引き継ぎ、主人と息子で取り組んでいる。米作りは新採の時の学級担任と同じで、初めてでも責任を持ってやらなければならない。やり直しはない。去年は、収穫が僅かに多くあり、主人は私の努力を認めてくれた。

これまでと同様、できる事を地道にやっていく後ろ姿をきっと見てくれるだろう。

安藤 文子 (教育・昭和50年卒)